

'73.04月

井深対談

## “その意気だ”というおやじの一言

ゲスト：西山 千

西山 千（にしやま・せん）  
ソニー・理事

## ステーションの一言が

- 井深** 西山さん、あなたは英語と日本語とどっちがメイン・ランゲージなのですか。
- 西山** それがわからないんです（笑い）。たとえば、いま井深さんとお話ししているときは日本語が先に出てしまうわけです。ところが、たとえばアメリカ人がおおぜいいたとしますと、やはり英語のほうが出やすいです。
- 井深** そうすると全く同じですか。
- 西山** これはどなたかが私を試験していただかないとわかりませんが、私の感じとしては、いまの段階では日本語も英語もどちらも同じような感じがいたします。
- 井深** いまの段階では、とはどういうことですか。
- 西山** と申しますのは、一時は私は日本語はしゃべることはある程度できたんですけど、読み書きは全然できなかった時代があるんです。その以前、つまり学校へ入る前はアメリカで日本語しかうちで使っていませんでしたし、親が日本から絵本などを輸入しまして……。
- 井深** 時間経過をお伺いしたいんですが、生れたのは……。
- 西山** アメリカで生まれました。それからいま思い出せる時点といえば、大体二つ半から三つくらいの間だと思います。母が私を日本へ連れてきたんです。二つ半の年で日本へ参りまして、一年半日本に住んでいたんです、四歳くらいまで。ちょうどその時期は周囲は全部日本語でございますから、もちろんうちでも日本語を親から聞いていたわけです。そういうような環境の中でしたから私はそのときは日本語がことばなんです。つまりそれ以外のことばは世の中になくくらいに思っていたと思うんです。
- それから今度は大体四つくらいのときにアメリカへもういっぺん帰りまして、ずーっと大学と大学院を出るまでアメリカで過ごしたわけです。そこで隣近所のアメリカ人の友だちと遊ぶときに、彼らは英語でしゃべるわけです。私はその英語の表現のし方がわからないけど、聞いてると大体何を言っているかがわかるんです、何となく。私はおそらく片言の英語をしゃべっていたか、英語の単語一つ二つ使っていたのでしょう。それでもけっこうわかるんです。いまでも思い出すのは、まだ学校へ行く前ですけど、近所の子どもと一緒におもちゃの汽車を使って遊んでいたんです。そうしたら友だちが「ここを駅にしよう」ということを英語で言っているんです。そのときに“ステーション”ということばを使ったわけです。ところが、ご存じでしょうが、明治から大正初期においては日本では“駅”といわないで“ステーション”といていたんですよ。
- 井深** そう、“ステンショ”と（笑い）。
- 西山** 私のおふくろもいつもステーションと言っていたんですよ私に。で、こいつ、日本語しゃべるなと思ひまして（笑い）。わかったというわけですよ。そういうところどころわかったという感じのする言語の中の道しるべが私の生活の中にあるんですよ、初めの時代に。
- 井深** 相当短い時間にすぐ話ができるようになったんでしょう、向こうへ行ってから。
- 西山** うちでは日本語ですから、小学校に入ってから、つまり六歳になって小学校に入ってから

らほんとに英語ができるようになったわけです。しかし私の記憶では、初めの日、先生が何をいっていらっしゃるのかさっぱりわからなかった。それが一カ月くらい後にわかるようになりました。それで一カ月くらいたったころにはもう友だちと英語で、言い合いできるようになりました。

**井深** うちでは全部日本語なんですね。

**西山** ええ。

**井深** 普通の場合とそれが違うんだな。

**西山** それから先ほど申し上げましたように日本語の読み書きができなかったときには、アメリカの学校に行っている小学校の間は、普通の学校の教室が終わると今度はあと一時間くらい日本語を勉強させられたわけです。日本語学校に行きまして読み書きを勉強させられたわけです。ですからそのころはまだできていたんですが、高校、大学の数年間に全部忘れてしまいました。ですから大学卒業したころは自分の名前すら書けなかった。ひらがなまで忘れちゃった。

**井深** 大学卒業されて、それから……

**西山** 大学院で二年間やりまして、二十三歳の年に日本へまた帰ってきたわけです。そしてその翌年ですから二カ月くらいたったころに通信省に入りました。通信省に入ったら日本語は人並みにできなければ仕事になりません。ですから自分の首をかけてのことばの修業です。これは一生懸命やりまして、自分で。辞書と首っ引きでやりました。

**井深** 字に関しちゃ苦労されましたでしょうね、ことばはそうでもないだろうけど。

**西山** いや、ことばもずいぶんそれから習いました。ものの言い方、言い回し方、そういうものは全部新たに勉強し直したわけです。

## “その意気だ”というひとことが

**井深** 私の遠い親戚がアメリカで、うちでは両親が日本語を使っているけど、おもてじゃ英語でペラペラしゃべっている。三歳何カ月ですね。帰ってきて今度は英語は聞けばわかるけれども、全然出てこない。それでもいいと思うんですね。

**西山** 私も小さいころアメリカ人の友だちと遊んでいるときは、大体意味はわかっていたと思います。いまでも思い出すのは、一回友だちと遊んでいて夕方になったから自分はうちへ帰ろうと思って引き上げようとしたら「おまえ、どこに行くのか」ということを、英語で私に聞くんです。その意味はちゃんとわかっているんですが「ぼくはうちへ帰るんだよ」ということを英語でどういったいいのかわからない。ほんとうに苦労しまして、うちへ帰っておやじにそのことを話したら、おやじが笑ってこういうんだといってくれましたけど、さっぱり私はそれをいえないんです。だからおやじが、「まあ、いいよ。ただホームといえればいいんだ」(笑い)。それだけは私はいえるということにして、翌日は、今度はおやじが私を買ったものに連れ出してどこかへ行く途中、同じ友だちがまた「おまえ、どこへ行くの

かい」と聞くので、私は「ホーム」(笑い)。……そしたらおやじがそのとき、理屈をいわなくて、「その意気だ。そのとおりだ」といってくれました。これが私にとりまして非常に自信を与えてくれました。おやじは教育者でも何でもありませんが、本能的にそういうふうに入ったんでしょう。それからもうひとつ、私にしてくれたことは、小学校の一年に入るときに「おまえは入っても先生のいうことを一言もわからんぞ。けれども心配するな」といったんです。「とにかくいけばいいんだ、いくうちにわかってくるからそんなことは心配するな」と。

**井深** わからないのがあたりまえだと思っていったんですね。

**西山** ええ。ですから先生が何を言おうとこっちはニコして、ほかの子どものまねをしていただけなんです。しかし一カ月、二カ月たつうちにちゃんと先生のいうことがわかるようになりましたね。

**井深** だから理屈で文法的に分解して組み立てたことばというのじゃだめなんです。そこに基本的な違いがあるような気がするんですな。

**西山** 子どもがことばを習うのはそうじゃないんですね。私が日本へ連れて帰られたときも、おふくろがいろいろと親戚や友だちのいるところを回ったわけです。里帰りみたいなもので。

**井深** どこですか。お国は？

**西山** 岡山です。それで岡山県のいなかのほうにも行ったり、京都に行ったり、いろんなところに行きました。ところが、ほかの子どもと遊ぶ機会というものがほとんどなかったわけです。周囲が全部おとななんですから。三つか四つぐらいの子どもがおとなの日本語を使っていたんです。ですからおとなが「よお、坊やどうかい」と聞くと「まことにけっこうでございます。しかし……」(笑い)なんかといて答えていたというんです。それで今度はおとながおもしろがっているいろいろと話し相手になってくれたんだそうです(笑い)。私のほうもけっこうおとな式に返答していたんだそうです。

**井深** 反対の話もあるんです。もう故人の方ですが、生れたときから五、六歳まで中国で中国人の乳母に育てられたんです。完璧な中国語を入れられたわけです。それから六歳以後は一切使わずに、三十何歳になってから青島の支店長になって赴任したんです。中国語がわかるなんて夢にも思わなかった。一ヵ月くらいいるうちにだんだん、それこそかすみ晴れていくように中国語がわかるようになってきたんです。それと同時に片言が出てきて、だんだんりゅうちょうになる。ゼロ歳から六歳に習ったものですから、発音というか、イントネーションというか、そういうことが完全なものだから、“この大人はえらい中国語ができる”というので大騒ぎになったんです。しかし、肝心のボキャブラリーというのは六歳のボキャブラリーなんです。完全な発音をするにもかかわらず、おとなのいうことは知らないことばばかりなんです。そうすると、むこうがこの人中国語できるのになぜこんなことがわからんのか(笑い)。それから亡くなる一年前(去年)ですか、中国へ行ったときには、やっぱり年とったせいかさっぱりわからなかったといっていましたかね。しばら

くいるとだんだんそれがもとへ戻ってくるんですね。

## みんなやらないだけのこと

**西山** 井深さんは三歳くらいの時のことを思い出せますか。別のいい方だと、一番最初のご記憶は？

**井深** ないですね。私のはちょっと遅いんですが、乃木将軍が自刃された号外が回ってきたときのことははっきり覚えています。

**西山** 明治四十五年でございますね。

**井深** 事柄としてはね。その前に、電気屋さんが電燈をつけにきまして、もちろんそのころは夕方でないとう電気がつきませんから、昼間のうちに工事がすっかり終わって電気のつきのを一生懸命待っていた。これは、それよりも二年くらい前の思い出じゃないかと思うんですが、やっぱり非常に強烈なものでないとちょっと思い出せませんね。

**西山** 私はやはり日本へ連れて来られたということが一つの大きな環境の変化で、おぼろげながら当時のことを思い出せるんです。たとえば最初におやじの里へおふくろに連れられて行ったときの、いろんなできごともある程度覚えているんです。門の外へ出て自転車にぶつかったことなんか。それから花電車が東京にありまして、夜になると電気をつけて走っていた……ご大典ですね。それから仁丹の広告。それからチューインガム。その当時日本に輸入されたらしいんです。

**井深** そうですか。そんなに早くね。

**西山** ええ。私のおばがチューインガムを口に入れてしかめつらをして「こんな辛いものはいやだ」とかいていたのを覚えているんです。おばといっしょに遊んだ記憶などわりあいと覚えているんです。それはおそらく三つぐらいから四つぐらいの間じゃないかと思うんです。二歳半だとちょっと無理だと思いますね。

**井深** 水上勉さんが話していたんですが「あるきれいなパターン」がいつも頭に出てくるんです。それが何だか全然わからなかった。模様から何からはっきり出てくるんだがあの人お寺の出ですから和尚さんになりかけたのかな 京都の本山へ行きましたら、お寺の中のパターンだったんだそうです。それがはっきりこれだったということ思い出したと話しておられたけど、これはやはり三歳以前だったといっていました。

**西山** 私の場合も再びアメリカへ戻ってきて、昭和九年にもう一ぺん日本へ帰ってきたときに、また岡山のほうに行ったわけなんです。そのときに、おまえのうちを当ててごらんといわれて、「ここだ」と私がいったらちゃんと当たりまして、どうしてわかったのかというと、門の前の二本の松の木をちゃんと覚えていたんですね。

**井深** パターンですね。いま、三歳何カ月でバイオリンをやっている子が十幾つレパートリーを完全にこなせるんですが、あれはまあ二歳何カ月から始めたんだらうと思うんだけど、こうした漠然としたわれわれの記憶などと違って、いろんな人の曲を十幾つも完全に弾き

こなせるということは、相当細かい記憶なんてものじゃないんですね。これは早くそういうひとつのきまったものについての繰り返しをやっていけば、大体のものはみんな植えてしまうのじゃないかという気がするんです。それをみんなはやらないだけなんだ。

**西山** そうかもわかりませんね。進駐軍のきたころです。中佐の家族が東京に住んでいまして、ある晩よばれましたときに、そこに小さな坊やがいて、やはり三歳くらいでしたか、とにかくもうものは言える年齢でした。その坊やが、おとぎ話とかいろいろな話を全部覚えているんです、英語で。ですから「何々の話をいってごらん」というと、頭からバアアといってくるんです。三分から五分くらいかかってもちゃんとしゃべってくれます。とにかく一分間でしゃべるといのはたいへん長いものです。それが三分間以上もかかって、ちゃんとその物語をいってくるんですよ。いかにも本に書いてあるとおりの文章なんです。これをちゃんとというんですね。それは結局、親から寝る前に読んでもらっていたんですね。好きだから何回も読んでもらっているうちに、非常に早く記憶しちゃうそうです。

**井深** 自分のものになっているかどうかは別として、私は初めは機械的でいいと思うんです。平塚益徳先生と「二歳半の子どものバイオリンというのは芸術性があるかないか」ということで大いに議論したことがあります。初めというのは機械的に間違いのないものを頭に入れるとか、実現できる形になって入っていれば、それがやがては土台になって自分のものになり、自分の解釈というものがでてくるから、そのときにその意味がわかっているだろうか、わかっていないだろうかなんてことは、私、追求する必要はないと思う。だから昔の「素読」というようなものは、あとになって意味が出てくるわけで、わけがわかってからそれを吸収するんじゃないとおもしろくないですよ、きっと。

## 通訳は“芸術”である

**西山** いまの芸術性の論争ですけど、これは芸術性がないというふうに話をもち込んでくること自体がおかしいんじゃないでしょうか。つまり、それならバイオリンをオーソドックスに勉強し始めるというのは、六歳から十歳くらいのときからと仮定しますと、十歳の子どものバイオリンを一年間勉強したから芸術性があるかといえば、同じことがいえるのではないですか。大して芸術性も何もありませんのじゃないですか。結局、初めは機械的に指の動きや、弓の動かし方やらのテクニックをまず習わなきゃいけないわけですよ。お習字だってそうですね。はじめはちゃんと筆の使い方も習わなきゃいけないわけで、そのときに芸術性をどうのこうのというのがおかしい。それと同じように、幼児に対しての教育だって私は定義の問題だろうと思うのです。

**井深** ところがカーネギー・ホールで去年の秋もやったけど、六歳、八歳の子どものバイオリンのデュエットをやるとみんな涙を流しちゃうわけです。だから人の心を動かすのがほんとうの芸術だとしたら、これはもうその曲からだけじゃなくて、やはりその子どもが一生懸命になってやるとか、いろんなこと、総合されたもの、それが芸術だと思うんです。

**西山** そうですね。ところが六歳の子どもはすでに三つぐらいからバイオリンをやっているわけです。初めの一年くらいでテクニックを身につけたら、あとは自分のものとして、もう五、六歳になれば芸術性はありますよ。漫画みたいな絵を描いて、「これがお父さんだ。これがお母さんだ」……それはもう私は芸術性といっていいんじゃないかと思うんですが…  
…。

**井深** ところが日本の教育というものは たとえば年代順にだんだん絵はきれいでじょうずになるけど、おもしろさというのはなくなってゆくんですね。だから芸術性をとっていくのが、いまの教育じゃないかとさえ思う（笑）。画一的な、きれいな、間違いのない定期で描いたような絵というものが、いい絵だというふうな……。

**西山** 初めは何でもとにかく。半ばものまね的に。バイオリンにしても、絵を描くにしても、スタートする段階で芸術性があるないと論ずるのは、私は間違いだと思うのです。どの年齢から始めたってその段階では同じだと思うのです。

**井深** 自分がそれをおもしろいと思いついたら、すぐ自分というものが入ってくるから、そこに芸術というものが出てくる。

**西山** 通訳をする場合に、これが一体技術であるか、芸術であるかという議論が出るわけです。たとえば通訳の検定試験をやってある基準に合格すれば、この人は通訳者としていいとか、悪いとかというふうにやろうじゃないか、という話があるわけです。

それに対してヨーロッパの通訳者協会の創立者であった、いまは八十歳以上の方でいまだに現役の国際会議通訳までやっているのですが、その人が日本に来てその話を聞いたときに「いや、それは間違いだ。絵かきを検定試験でこの人はこうだ、ああだとはいわんだろう。インタープレティング（通訳）はアートである」というんですよ。この場合のアートと芸術は少し違うかもわかりませんが“術”であることはたしかなんです。

**井深** わかります。“術”以上のアートですね。

**西山** 「それだからアートは試験をするものじゃないんだ。実際に活躍をして、そして通じるか、通じないか、役に立つか立たないかが決定的な要素である」というわけです。そこで私が思うのは、通訳をする場合に決して字引きのように単語を展開しているわけじゃないんです。日本語と英語との間をただ展開しているのじゃないんです。したがって発言者のいっていることばは思想、情報、そういう感情を全部コミュニケーションを自分がまず受けて、それを新たに別のことばで再表現するわけです。バイオリニストがだれか偉い作曲家の作品を演奏するとき、これは芸術である 通訳をする人は同じことをいえると思うのです。

そういう意味で“芸術”というものを定義すれば、いまのご指摘のように一体どの年齢から芸術の段階になり、あるいはどの年齢以前だったらものまねの段階だということも、これはなかなか境界線を引くことはむずかしいだろうと私は思うんですが。つまり芸術の定義いかんによりましてはずいぶん違うと思うんです。

**井深** それから芸術でなきゃならないということもないんだね（笑）。

## シャレがわかれば一人前

**西山** これは言語の問題になりますけれども、単語はそれぞれ単独に完成した意味の記号として存在してはいないわけです。

**井深** それは二歳のときだけです。さっきの“ホーム”のときだけです（笑い）。

**西山** そうですね。私はホームというのはうちだけだと限っているとは思っていなかったわけですからね（笑い）。しかしそう定義すればそれでもいいんですよ。私そう思うんですよ。とにかくそれは別にして、ことば（単語）というものはそれぞれに完成した意味をもっていますけれども、一般に用いられることばというものは、ほかのいろいろな一連のことばのコンビネーションによってきまっちゃうわけです。それで意味が完成してくるわけです。たとえば「おっちょこちょいは英語でどういうんですか」と聞かれたら「そんなのは英語にはない」と答えざるを得ないのは、“おっちょこちょい”ということばを一体どういうコンテキスト（文脈の前後関係）で使うかによって、表現のし方が違うわけですから。

**井深** 何というんですか、おっちょこちょいは（笑い）。

**西山** ですからありません（笑い）。おっちょこちょいをどういうところに使うかによります。ことばというものは、手まね、足まね、しぐさ、表情、全部含めてのことばでございますね。ですから一番いい方法は、通訳をする場合でも、国際会議の場合でも、発言する人の顔全体がよく見える場所がいいんです。ただイヤホンだけにたよってその言語を通訳していますと非常につめたい、無表情なことばにしかならないんです。声の表情にまで影響してきますね、見るのと見ないのとでは。

**井深** 通訳する場合、日本語から英語と、英語から日本語とどっちが楽ですか。同じですか。

**西山** やはり同じですね。

**井深** ああ、そうですか。

**西山** 内容によって、言いあらわしやすいものとそうでないもの、それで苦労します。ただ物理的な違いがあるわけです。物理的というのは、音節の数の問題なんです。日本語は非常に音響の数を多く使わなければ、ある一つの内容を表現できないんです。英語の場合は音節の種類が非常に多いために、数少なく使っても同じ情報を表現できるわけです。たとえば“ He came here ”これは三音節ですね。これを日本語でいう場合には「かれはここにきた」でしょ。八音節なんです。どうしてもそうしなければいけないわけです。そうすると、同時通訳の場合に、早 で英語でしゃべられると、それ以上の早口で日本語で話さなければいけないんですから、非常に苦労します。

**井深** 私など英語で演説をしようというようなとき、最初は日本語でこしらえますね。それをいざ自分でつたない英語で直そうと思うと、とにかくいらぬことをいっぱい言っているんです。同じことを繰り返したり、言わなくてもいいことを入れたり。英語に直してみると初めて、自分の言いたいことがむしろはっきりするというケースが非常にあります。日



本語というのは非常にあいまいなもので、いろんな飾りをつけて、だいたいその人は意味をつかめるような言葉なんです。ところが英語の場合は、われわれの語学力が足りないせいもあるけれど、単刀直入にパッパッとはっきりさせなければ表現できないわけなんですよ。

**西山** それもございましょうが、また反対もあり得ると思います。つまり、原著者が英語国民であって、いかにも自然に表現しているようにみえます。それを今度は日本語に訳すわけです。それをあまり忠実に訳すと、これは直訳口調は別問題として、直訳口調でなくても、ずいぶんむだなことをいっているなと思うときもあります。

**井深** そうですか。

**西山** ええ、むしろ日本語としてはある程度省いたほうが、もっとわかりやすい。

**井深** そういうむだなことをいっているような英語というのはわれわれに絶対にわからないんだな(笑い)。一生懸命その人のしゃべるのを聞いていると、ずっとたどっていけるわけです。ところがジョーク的なことをちょっとそこに入れられると、非常にシンプルなものでも、とたんにわからなくなる。言い方というのか、何でもないことがわからなくなる。これは何回も経験しているんですが、ジョークをいうときは、すでにその人の心がまえじゃない、言いがまえが違ってきているんですね。そうすると発音から何から全然違って出てくるんです。

**西山** なるほど。英語の場合ですね。その点は、われわれ日本人が話をしている間にちょっとなりやれを入れるとか、何とかいいますね。それを日本語を勉強している外人が聞いてもひょっと見過ごしてしまうとか、わからないという場合がありますね。

**井深** だから落語を聞ける外人というのは本物なんですね。

### 基礎発音のエッセンスを“歌”に

**西山** こういう実話があるんです。日本に住んでいるアメリカ人で、ことばの才能を持っているうえに、ものまねがうまいんです。たとえばアイルランド人が日本語をしゃべるときにはこうだとか、ドイツ人だったらこうだとか、日本語をしゃべってくれるんです。こっちはおなかをかかえて笑っている。完全にその民族のなまりで日本語をしゃべるんです。彼が一時札幌に駐在していました。札幌にソビエトの領事館があるんです。それで、たとえば知事の主催とか、市長の主催でレセプションがあったときに、ロシア人と会うわけです。そうするとこのアメリカ人がロシアなまりで英語をわざとしゃべるんです。そうしましたら評判になりまして、ソ連の人達が、「あのアメリカ人の英語だけはようわかるんだ。どういうわけだろう」(笑い)。ソビエト人は、それがロシア語なまりとは意識しないんです。とてもわかりやすい。実にじょうずな英語だ。ほかのアメリカ人の英語はわかりにくいけれども……(笑い)。

**井深** 私が聞いてわかるような英語の演説をする人は、英語が大したことはなく、私が聞くと

わからない演説をするのがうまい英語なんでしょうな(笑い)。茅先生のお孫さんがボストンで生れたんじゃないですかね、それで三つか四つに帰ってきて「ぎゃあぎゃあ」泣いていたんですって。たまたま茅先生のところへ遊びにきていたアメリカ人が、「あれはニューイングランドだ」と言っていたそうです。

**西山** ほう、泣き方で。

**井深** うん。ぎゃあぎゃあ泣いてだだをこねていたんでしょう。

**西山** なるほどね。いまアメリカの大使館にずっと長い間いる人で、翻訳部の部長をしているアメリカ人がいますが、この部長が日本語が非常にうまい。それからドイツ語、フランス語、ロシア語、とにかく彼はどこか東欧の国から親に連れられて、少年時代にアメリカに渡った。ですから十歳か十一歳くらいまで東欧に住んでいた。そのころのことばもまだ覚えているというんです。彼は十カ国語くらいできるんです。それで彼に話したら、「自分はいったんことばを聞くと忘れられない」それは特殊才能でしょうね。

**井深** だから、私はファンダメンタル(基礎的)な発音、たとえば「フランス語のこれこれの発音をしろ」といったって、青年になったらどうにもできないような発音というものがある。それからイントネーションもどうにもまねできないものがある。そういうものだけをかためてエッセンスというか、どうしても必要な要素だけを、フランス語も、ドイツ語も、英語も、みんな子どものときに歌みたいにしておぼえさせておく、そういうカリキュラムをほしいと思うんです。そうするとあとからやれる英語と日本語、英語とフランス語、英語とドイツ語といったような、共通な発音とか、そういうようなものは容易にあとからまねできるんじゃないか。

**西山** うちの娘が幾つでしたかな、二つか二つ半くらいのときに、わざとこれをいえ、あれをいえ、と英語をいわせたんです。そうすると小さい子どもなりの発音でちゃんというんです。私のまねをするわけです。ところが「ライス」というとうちの娘は「ワイス」というんです。それで私、アメリカ人に「お宅のおじょうちゃんは“ライス”をどういうか」といったら、「ワイス」というっていうんです。発音が全く同じなんです。それで二人で大笑いしたことがあるんです。その年齢のころは民族と関係なく発音が全く同じなんです。

**井深** メカニズムがね。

**西山** 自分の舌の回る範囲において同じようにやっちゃうわけです。

**井深** だから聞けなきゃ発音はできないですね。時に、西山さんの場合。それで、ご自分であるいはほかからみて、ふたつの国語が完全におできになるということによってのプラス(あるいはマイナスでもいいですが)語学を除いてみておつかみになったことがありますか。

**西山** プラスがあるかないかということですね。

**井深** 例えば倍の人や文化を知り得る……。

**西山** それだけ大ぜいの人と意思疎通できるということが、コミュニケーションをいただき、インフォメーションをもらうという、副産物ですよ、その副産物の恩恵は非常にありますよね。

**井深** それから私が想像するのに、日本人とアメリカ人とではこんなに同じことでも、考え方が違う。だからどうそれを考えるのが一番正しいのであるかといったような、そういう批判はできるわけだね。両方知ることによって。われわれ片方しか知らないと判断ができないわけなんだね。客観性とか、批判力というようなものが人より優れているとお思いですか。

**西山** そうは思いませんね。批判力がどうのこうのということは全然ないと思います。ただこの問題を、英語と日本語ということばのほうから入らないで、二つの文化、そういうところから入っていきますと、ことばは両方できる。二つの文化の内容はある程度わかる。また理解もできる。そうしますと、今度はその文化の間で緊張とか、衝突があるような場合、それがどういうところに原因しているか、ものによっては衝突を避けるように、べつに理屈ではなくて、自分が半ば本能的にそれを自然に避けてしまうというような、そういうものはございますね。

**井深** だからこれが「理解と誤解」という、“西山名著”が生れてきたわけですね。

**西山** 「めい」は迷うという字ですがね（笑い）。

**おわり**